
死神と人間

休憩所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と人間

【Nコード】

N8602M

【作者名】

休憩所

【あらすじ】

男は死を畏れぬ、《人形》のようで《死人》のような人間であった。

ひとりの男の、笑えぬ喜劇のお話。

男がいた。

何もない、ただ荒れているだけの荒野にその男はいた。

ただ一点を見つめ、呪うようにあるいは祈るように、あるいは願うように、何かに斯うように。

その男には表情というものが感じられない。

否。

表情のみならある。

笑顔だ。

しかし、その笑みは嘲っているようにも至極幸せそうにもあるいは微笑んでいるようにも取れる笑みだった。

しかしそのどの種類の笑みにもあの笑みは属さないだろう。
まるで異質。

死人のようであり、賢者のようにも、またはなんてことないただの人のような。

とにかく異質、いや、遺失であつた。

>己<というものがまるでないかのように、男はその場にたたずんでいた。

わたしは、彼を恐れた。人間ではない、寧ろ人間より高貴なわたしに人間である彼を畏怖したのだ。

寒気もしたし、動悸が激しい。

次の日。

同じ場所に男はたたずんでいた。

やはり、彼の周りだけ空気が違う気がする。

――君子危うきに近づかず。

されど、悲しい動物の性か。

わたしは彼と話がしなかった。

何を感じ、何を思い、如何なる育ち方をすればこんな>人形<のようで>死人<のような人間になるのだろうか。

――興味を持ってしまった。

《男、》

彼はわたしのコエにも動じず淡々と返してきた。

「ああ、死神、昨夜から覗いていたかと思えば今度はなんだ。」

死を纏い、死へ誘う我らを畏れぬ生き物など初めてだった。

《男、我ヲナゼ恐レヌ、畏レヌ》

男はなんともなしに、嗚呼例えば地球は丸いか四角かと問われた時のようにきょとんとした後に、

「恐れなければならない理由がない。もちろん、畏れる理由もない。」

死を恐れぬ人間は見たことがある。
しかし、畏れない人間など、まして理由がないなどと言う輩など…

「死神、俺を、連れていくのか。」

淡々と…表情もなく、わたしが恐れたあの「笑み」で男はこちらに笑んだ。

《……逝力ヌ。 男、貴様ハ マダ》

まだ、死なないはずだ。

男の寿命を告げる、砂時計はまだまだ余裕がある。「まだ、
ならば 何時か俺は そちらに 逝ける のか。」

それは質問のような響きであつたが、決して質問ではなかつた。

ならばわたしの応えは。

《……分カラヌ、男、何故 死 ヲ 畏レヌ》

男の魂はもはやわたしの知る冥府の底よりも深く、濃い漆黒に染ま
っている。

男が死を畏れぬ限り、冥府には来れまい。

「言つただろう。死を畏れる理由がない。嗚呼違つな。生を尊いと
感じていると言つた方が正しいか。」

尊い、と。

《ナラバ尚ノコト。生ト死ハ離セヌ。生ヲ尊イト感ジルナラバ 死
ヲ 畏レル ハズ ダ。》

「……ある、男が……いた。どこにでもある悲劇だ。いや、喜劇かな。
」

男は唐突に話はじめた。

「男には、妻がいた。娘と息子もいた。幸せ、だった。春の木漏れ日のように柔らかで暖かな日々。男は生を楽しんだ。しかし、ある日・・・娘が死んだ。突然だ。息子も、亡くなり男は・・・死を憎み、嘆き、……恐れた。」

「男には妻と、家族と過ごした家だけ残った。」

「この、宝だけは、放さぬと、男はありつたけの力で抱きしめていた。」

「そして――妻が、死んだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「嗚呼、わたしには…何もない。この家など…！ ただの大きな箱に過ぎない！」

死神が笑う、嗤う。

「家など燃やして、わたしは、そちらに行きたい！」
男が泣いて、泣いて、嘆いた。

「嗚呼、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、」

何故、わた、しだけ、行けぬ！

死神は嗤う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「死神、わたしは全て失った。全てだ、総て。長く暗い年月は自己すらも隠してしまう、暗い暗い闇色の檻になり、わたしをも、覆い……！」

男は、泣いた。

「何故……わたし、わたし、っは！」

「嗚呼、わたしは、わたしは」

《あなた。》

聞き違えるはずがない。

この、優しい子守唄のような音で話す女性を知っている。

「か、れ……ん……？」

何年も発していなかった単語なのな、スツと口をついだ。

《あなた……わたしは、幸せなのです。あなたと、出会えたことが。子供達と過ごせた日々が。》

ああ、だからどうか。

なかったことに、しないで。

「かれん……」

男の目に、透明の液が溢れた。

男が死を憎み畏れなかった心が、死を初めて畏れたのだ。

死神は、軽く笑んで、鎌を、ふるった。

仮面が剥がれた死神のその顔は彼が生涯愛した人のものであった。

（後書き）

語ることはなにもないです。

あ、誤字脱字とかコメントとか下さいね！

お待ちしております。（切実ッ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602m/>

死神と人間

2011年1月3日23時10分発行